

# 「物語る」とは何か

文学と歴史叙述に見るその可能性と不可能性

木内翔

## 『指輪物語』にみる機械化と自然の反乱

先日、イギリスの作家J・R・R・トールキンのファンタジー小説、『指輪物語』を読んでいると、興味深い一場面を見つけた。それは、この作品の第二部『二つの塔』の中で起こる、急激な機械化による自然破壊と森の住民による逆襲の場面である。魔法使いサルマンは、自分の本拠地としている城塞都市アイゼンガルドの機械化を進め、結果、自然を破壊し、周囲の森の住民の多くを死に追いやる。本文中には、サルマンが機械化し、人工的な要素を増やしたその砦について、「サルマンの時代も後半になると、ここは緑が根だやしになりました。道は堅い平石で舗装され、そのへりには並木の代わりにあるいは大理石であるいは銅であるいは鉄でできた柱が互いに重い鎖でつながりあわされて並んでいました」、「立抗はたくさんの坂道やらせん階段ではるか下の洞窟に達していて、その多くの洞窟にサルマンは宝物庫、倉庫、武器庫、鍛冶工場そして大きな炉を持っていました。ここでは鉄の歯車が絶えず回転し、重い槌音が響いて

いました。夜にはもうもうと排気口から湯煙が噴出し、それは地下の明かりに照らされて、赤く、青く、あるいは毒々しい緑色に見えました」などの記述がある。勿論、これは架空の世界での出来事であるが、作品の語り手は、本文中のある個所ではこのことを仄めかし、また他の個所では低い評価をはっきりと下している。例えば、「サルマン自身はこれを改良と考えていたのですが、それは彼が惑わされていたからで、つまりこういう技術や巧妙な仕組みはすべて、彼が以前の知恵を捨てた代わりに得たもの」にすぎないと主張し、急速な機械化を批判的に捉えている部分が見受けられる。しかし、古くからあった砦がこのような機械都市に変貌する過程で、傷つけられた森の住民の残党たちが、主人公と協力して都市を破壊し、自然の回復に着手する。

私は、『指輪物語』のこの部分は、本誌のテーマである「物語ることの可能性と不可能性」について考察するための題材の一つであると考えた。というのも、この部分には物語行為の諸々の性質と可能性が含まれているからである。

## 「物語る」とはいかなる行為か

では、この題材をもとに、まずは「物語る」ということの可能性について考察を行うが、その前に「物語る」ということ、物語行為とはどのようなものなのか理解を深めたい。我々は普段、さしたる注意を払わずに「物語」や「語る」等の語を用いる。その結果、「物語る」という語の指し示す範囲は拡大し、意味が曖昧となってしまった。そのような理由から厳密な定義を下すことは困難であるが、おおまかに言うならば、物語行為とは、①話題の範囲を設定し、②採り上げる出来事を選択した後、③それらに意味を与え首尾一貫した説明を加えることであると言える。このような考えに立つならば、必ずしも小説や劇だけが物語ではないということが分かる。例えば、小さな子供が、親に学校での出来事を伝えるとき、彼ないし彼女は、①昼休みや放課後といった時間と、校庭や教室等の空間を設定し、②転んで怪我をした、保健室に行った、体育の授業に参加できなかった等の取り上げるべき出来事を選択し、③それらの出来事の間にある関係を説明し、首尾一貫した話を紡ぐ。校庭で昼休みに遊んでいたら、転んでしまい、怪我を治すために保健室に行っただから体育の授業には出れなかったといったように。ここではすでに「物語」の効果が作用しているのである。

『指輪物語』のこの場面は、どのように物語られているのだろうか。著者であるトルキンは、まず①「中つ国」という架空の世界を

設定し、②採り上げるべきその世界での出来事を創造し、③それらを単純な原因-結果の関係で結んでいる。先に、「物語る」という行為においては、「採り上げる出来事を選択する」という段階を経ると述べたが、フィクションの文学作品においては、それはしばしば「採り上げる出来事を創造する」ことに置き換わることをここで付け足しておく。以上のことから、この場面が典型的な「物語」であり、「物語る」という行為を通して諸々の要素が結び付いていることが分かる。

では、次に物語行為の可能性、有用性について考えたい。端的に述べるならば、物語行為の可能性とは、語り手の主張を表現する幅を広げることである。それは単に、はっきりと明言された主張だけを意味するのではない。先に述べた①話題の範囲の設定と③出来事の間にある関係を説明することも、語り手の主観を表現する手段となりうる。さらに言えば、①、③のステップは、著者の主張のうち、明言されていないものを読者に示す装置なのである。具体的な説明を、先に言及した『指輪物語』の場面を例にとり、行う。トルキンはまず①「中つ国」という架空の世界



『新版 指輪物語(3) 二つの塔(上)』

(評論社、1992)

を創造し、その中のアイゼンガルドという皆を場面として設定した。それは、魔法使用によって急速に工業化された皆、つまり人工の世界と周囲の森、すなわち自然の世界の対立の場でもあった。ここからは、急速な工業化による公害問題と都市問題を目の当たりにしてきたトールキンの、機械文明への疑いの気持ちや、自然回帰の思想、そして工業化による社会の歪みがまだ生まれておらず、人間と自然が調和の中に暮らしていたという理想化された前近代社会へのノスタルジアが読み取れる。このノスタルジアは、Medievalismと呼ばれ、一九世紀後半の英文学に大きな影響を与えた思想の一つであった (Blanning、二〇一〇)。また、工業化された世界と周囲の自然の世界の対立を、過度の工業化↓自然の反乱↓破滅という因果関係で整理し、説明していることから、彼が行き過ぎた機械化に対して、そしてひいては近代文明の暴走について持っていた危機感がうかがえる。これらのことは明確に言葉にされてはいないが、物語の形式を取ることで浮かび上がってくる。「物語る」ことの可能性、つまり語り手の表現の幅の拡大とは、そのようなものである。

## 歴史叙述における物語行為の可能性と不可能性

しかし、このような物語の可能性は、フィクションにおいては大変効果的であるが、他の分野、例えば歴史叙述等においては、「物

語る」ことが孕む可能性と分かちがたく存在する。歴史叙述もまた、①叙述の対象とする時代と地域の設定、②採り上げる出来事を選択、③それらに意味づけをし、首尾一貫した説明を加えるという手順を踏んでいることを考えに入れるならば、一般に客観的な色合いの強いものであると考えられてきた歴史叙述もまた、物語の一部であるということが言える。「物語る」という行為が歴史叙述を成り立たせているのならば、当然、その客観性というのは否定されることになる。と言うのも、①、②、③の作業はいずれも、書き手の主観に沿って行われるからである。①についてだが、言うまでもなく、文明の誕生から現代に至るまでの人類の歴史全てを叙述することは、不可能であるから、歴史家は叙述にあたってその範囲を設定し、その中で導入、本題、まとめのように展開を持たせる。このような話の枠組みは、物語の、はじめ、なかば、おわりという構造と共通である (ホワイト、二〇〇二)。また、②に関しても、無数にある出来事の中、どれを歴史叙述の材料として用いるか選択する際の基準となるのが、歴史家の問題意識や価値観であるという点は同じだ。また③は書き手の問題意識の影響を受ける (カー、一九六二)。それは換言するならば、歴史叙述から、書き手の興味関心や問題意識が読み取れるということも意味する。以上のことから、歴史叙述を成り立たせるうえで「物語る」という行為が大きな役割を果たしていることと、その結果叙述に主観的要素が非常に多く入り込み、客観性を保持できない程で

あるという問題点とが示せたと思う。歴史叙述は、書き手の表現の幅を広げるといふ「物語る」ことの可能性を手に入れると同時に、決して絶対的な客観性には至ることができないという不可能性も併せ持っているのである。小説や歴史叙述だけでなく、我々が接する様々なジャンルの読み物の多くは、「物語る」という行為によって成り立っている。それらを読む際、内容云々だけでなく、先に述べた可能性と不可能性の両方に思いをめぐらせ、文章を成り立たせている原理にも注意を寄せらるならば、より深い理解に至るのではないだろうか。

※参考文献として、ヘイドン・ホワイト(海老根宏、原田大輔訳)『物語と歴史』(リキエスタの会、二〇〇一)。野家啓一『物語の哲学』(岩波書店、一九九六)。J・H・カー(清水幾太郎訳)『歴史とは何か』(岩波書店、一九六二)。J・R・R・トールキン(瀬田貞二・田中明子訳)『二つの塔』(評論社、一九九二)。Tim Blanning “The Romantic Revolution” (Phoenix 二〇一〇)

**木内 翔** Sho KIUCHI

早稲田大学文学部西洋史コース在学中。